

感染症・予防接種レター (第74号)

日本小児保健協会予防接種・感染症委員会では「感染症・予防接種」に関するレターを毎号の小児保健研究に掲載し、わかりやすい情報を会員にお伝えいたしたいと存じます。ご参考になれば幸いです。

日本小児保健協会予防接種・感染症委員会

委員長 多屋 馨子
菅原 美絵

副委員長 岡田 賢司
津川 毅

乾 幸治
古賀 伸子

三田村敬子
三沢あき子

並木由美江
渡邊 久美

生涯にわたる健康対策

～予防接種を楽しみながら受けるために～

現在、日本におけるワクチンで予防可能な病気 (vaccine preventable disease: VPD) に対する対策は、10年前と比べて大きく変わり、海外で使用されているワクチンのほとんどを接種することが可能となった。それに伴い、接種の開始時期、順序、接種回数、定期接種として接種可能な期間が短縮されるなど接種スケジュールが過密化している。各ワクチンに標準的接種期間があるのは、その時期に罹患頻度が高く、重症化や後遺症を考慮して、その疾患に対して、最も適切な時期に免疫を保有した状態を作っておくための設定である。低月齢児ほど必要なワクチンが多いのは、母親からの移行抗体が減弱することと、なるべく早期に免疫を獲得して、その病気に罹らないように予防するためである。この時期は、集団生活が始まる時期にも重なっている。

保護者にとって予防接種は、子どもが生まれて育児にまだ慣れていないときから始まるため、妊婦のときからの基礎知識がないと生後早期からの接種にとまどいが生じる可能性がある。また、予防接種は子どもが受けるもので大人には無縁のものという感覚があるが、近年は成人の麻疹、風疹、百日咳の発症がある。この危険性は本人の不利益とともに、小児への感染源となり、より抵抗力や体力の弱い子どもたちが罹ることで重症化が心配される。その対策として、成人への VPD 対策も必要である。

このように、生涯にわたって予防接種は感染症予防に必要であり、これを必要な時期に忘れずに実施するためには工夫が必要である。予防接種スケジュールに沿って計画的に行うことに加え、楽しみながら行うことが大切である。予防接種を生活の一部と捉え、子どもたちの健やかな成長を願って行われるさまざまな祝

い事や節目の行事に合わせて計画することで、忘れずに実施できる。

お宮参り：生後1か月頃、31～32日目に神社に参詣し健康と長寿を願う行事。お宮参りの日取りとともに、ロタウイルスワクチンの接種日程を計画するとよい。1価と5価の2剤から選択が可能で、接種（経口）はいずれも生後6週（42日目）から可能で、規定の接種を完了するためには14週6日（104日目）までに1回目の接種が必要である。生後2か月から他のワクチンとの同時接種が推奨されている。ロタウイルス初感染時の症状は重いことから、保育所等に産休明け保育（生後57日目）を希望する場合は、入園前に1回目を服用するとよい。

お食い初め：生後100日目頃に行われ、初めて箸を使うので箸初めともいわれる。生後2か月から接種可能な予防接種は、B型肝炎・ヒブ・小児用肺炎球菌ワクチンで、この行事の頃は2回目接種の時期である。ロタウイルスワクチンを受けていた場合は、別の種類のワクチンを接種するまでに中27日以上あける必要があるため接種間隔には注意が必要である。生後3か月は、定期接種として接種が勧奨されている4種混合ワクチンの開始時期でもある。なお、B型肝炎・ヒブ・小児用肺炎球菌・4種混合ワクチンはいずれも0歳で3回接種であり、BCGも生後5か月になったら忘れずに受けておきたい。

1歳の誕生日：一升餅という、米1升から作った餅（約2kg）を背負わせて歩行させる誕生日の風習がある。この時期は移行抗体の減衰により感染症罹患が増えてくる年齢である。1歳の誕生日を迎えたら、MR

ワクチン（第1期接種）、水痘ワクチン、おたふくかぜワクチンの開始時期である。水痘ワクチンは1～2歳で2回接種であることに注意が必要である（2回目の接種は1回目の接種から6～12か月経った頃に行う）。また、1歳は、ヒブ・小児用肺炎球菌・4種混合ワクチンの4回目の接種時期である。

七五三：性別で祝う年齢が異なるが、子どもの成長を祝い、この先の健康を願う年中行事である。この時期には、各種ワクチンの標準的年齢や勧奨接種完了年齢を確認しておきたい。たとえば、4種混合ワクチンは7歳半まで、ヒブ・小児用肺炎球菌ワクチンは5歳の誕生日前日まで定期接種として接種可能である。また、3歳から日本脳炎ワクチンの接種を開始するなど、母子健康手帳の接種歴を確認しておく。

小学校入学：入学を前に、年長児になったらMR（麻疹・風しん混合）ワクチン第2期接種を行う。就学の準備として、“ランドセルの購入と一緒にMRを”と子ども自身にも意識させ自分の健康を守るために予防接種の大切さを伝えていきたい。接種年齢で確認しておきたいのは、入学前の1年間とは3月31日までのことで4月1日からは有料となることを保護者に伝える。

小学校卒業：二種混合（ジフテリア・破傷風混合：DT）ワクチンの接種対象年齢（11～12歳）である。第2期接種として重要である。卒業間近の2～3月はインフルエンザの流行や各種学校行事が重なり、受け忘れてしまわないよう余裕をもって接種を行ってほしい。

高校卒業年齢および大学入学：医療系・福祉系大学や専門学校の学生や職員は、これまでに必要回数のワクチンを受けているかの確認、必要に応じてVPD関連の抗体検査を行い、不足している場合は予防接種が必要である。

最後に、母子の健康維持に貢献したものとして「母子健康手帳」の果たした役割は大きい。1937年「母子保健法」が施行され、アジア太平洋戦争直前にあって人口の増加施策を進めるに伴い1942年、国による「妊産婦手帳制度」が発足した。この手帳を持つことにより、戦時下においても物資の優先配給や医師の診察が保証され、出産から育児の環境が著しく整備された。その後、「母子手帳」、「母子健康手帳」へと名称を改めながら、内容も医療機関からの成長・発達の記録に加え、母親が育児記録として子どもの姿を書き込める方式へと改良されてきた。現在、手帳に記載されている既往歴や予防接種歴は乳幼児期に留まらず生涯にわたり、個人の健康に関わる記録として重要である。やがて卒業や就職で親元を巣立つとき、健康のお守りとして大切に手渡してほしい。

文 献

- ・国立感染症研究所. 感染症疫学センター HP.
- ・予防接種の手引き 2018-19年度版. 近代出版.
- ・日本小児科学会 HP. 日本小児科学会が推奨する予防接種スケジュール.
- ・日本保育保健協議会. 保育と保健 Vol.25 No.1.

（並木由美江）